

祝

2017年3月 名古屋学院大学博士号(経営学)取得

宮島康暢さん(取得時53歳)

【論文テーマ】中小企業の発展段階に応じた「経営理念に基づく経営計画」の策定および実行に関する研究 ―情報の非対称性緩和の視点から―

従業員が幸せな中小企業を増やして、世の中を良くしたい

■ノドに刺さった小骨のような挫折感

21世紀に入ったころ、都市銀行から政府系ベンチャーキャピタルに転職、名古屋学院大学のMBA課程でも学んでいた宮島康暢さん。マーケティングの研究者・羽路駒次教授との出会いが、博士号を目指すきっかけとなった。社会人の大学院入学が増え始めていた2005年、宮島さんも「中小企業の企業価値」を研究テーマに博士課程に進んだ。

しかし、タイミング悪く仕事が多忙になり、博士号取得は諦め、3年目で単位取得退学を選んだ。宮島さんは元々目標を立てて勉強するのが好きで、仕事に関連したファイナンシャルプランナーや中小企業診断士の資格試験も、計画通りクリアしてきた。それだけに、仕事のためとはいえ途中で諦めた博士号のことが、ノドに刺さった小骨のようにずっとひっかかっていたのだ。そのころ大学院の再入学制度ができて、合計6年までは籍を置くことになった。宮島さん自身も、仕事に関連して中小企業学会で研究発表をしたり、論文が学会誌に掲載され、研究心に再び火がついた。

■自分のためだと感じた博士号取得支援募集

2013年、5年ぶりに大学院に再入学し博士号に再チャレンジを始めた宮島さん。最後のひと押しは当財団の博士号取得支援事業だった。「自分のために用意してくれたのでは？」と共感し応募したが、残念ながら不合格。2年目も最終面接で落ちた。一瞬諦めかけたそうだが、3度目の応募で2015年度に合格、そうそうたる面々と共に、有名大学でも

ない自分が認められずごく自信になったという。

2014年には仕事でも独立開業し、へきずなコンサルティング・コーチングを立ち上げた。経営者の特権は時間を自由に使えることだ。前職からのつながりで、開業時点で数社の顧問先に恵まれたのも経済的に大きい。5年前と違って、周りのいろんなことがうまく回転してくれた気がする。

■中小企業ほど社長の思いが経営に影響する

「大企業の多くはサラリーマン社長で、せいぜい5、6年で社長が交替していきます。それに比べて中小企業の社長は何十年も経営者であることが多い、その思いや企業理念が経営に及ぼす影響が大きいのです。だから中小企業こそ経営理念を明確に文章化し、従業員にはもちろん、取引先や金融機関に対しても見える化しなくてはいけないのです。



財団協賛会員のコーチ・エィでコーチングを学び、その時から財団を知っていたが本支援事業には感激したという。

創業社長の場合は、比較的思いを訴える場面も多いのですが、誰もが話し上手とは限りません。さらに代替わりすると、創業者と2代目の間に、社長と従業員の間、社員と社外の人との間に、意識や価値観のギャップが生まれがちです。その状態を『情報の非対称性』と言います。

私は銀行にもいましたが、昔は情報の非対称性を正すことができず、わからないから融資しないという選択に流れていました。今は銀行も変わってきたので、経営理念とそれに基づく経営計画を、情報として積極的に与えることが必要なのです。もう一つ、非対称性を解消しようとすると、必然的にコミュニケーションが活発になることも有意義です。そして、経営計画を実行できたかどうか、事後の情報を共有することも欠かせません」

■お手本としたい「年輪経営」

宮島さんがお手本としたい中小企業の一つにあげるのは、「年輪経営」の伊那食品工業である。訪問した際、塚越寛会長の思いや価値観がすべての従業員に浸透し、理解というレベルを超えた、各人の誇りと自信になっているのを感じたという。コンサルティングやコーチングを通して、1社でも多く、伊那食品工業のような従業員が幸せになる中小企業を増やす手伝いをしたいと語る。

「これから博士号にチャレンジする方、まさにチャレンジ中の皆さん、決して諦めないでください。『諦めないことが成功に近づく唯一の道である』という言葉を贈りたいと思います」